
本気の初恋

鶲鳴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

本気の初恋

【Zコード】

N1379BA

【作者名】

翳鴉

【あらすじ】

幼い頃、幼馴染が初恋の相手だった少年、雷世。そして告白したが、その時に振られてしまい。そのショックで幼馴染と離れて10年後。

プロローグ 1

恋をした。

だけど、俺の恋は普通じゃない。

幼馴染に恋なんて、あつれるわけが無い。

自分自身の思いを押し殺してずっと一緒に居た。

だけどある日…。

「お前の事好きなんだけど…。」

言ってしまった。

「「めん。同姓はなし。俺はお前の事幼馴染でいい奴と思ってたから。」

振られた。

自分自身が悪かった。

だから諦めた。だけどあいつを思つぽど、俺の心もボロボロだった。

そして、あいつの日の前から離れて10年後。

黒咲 くろさき

雷世 らいせ

20歳の男。

生意氣で冷静？で結構親切で優しい。
褒められると単純に照れる。

小説が大好き。

金持ちの一人息子。

守川 幽

24歳の男。

生意氣で横暴でいじめるのが好きで案外優しい。

小説の編集者。

10歳の妹と二人暮らし。

橋川 紅葉

20歳の男。

明るくて優しくて真面目。

雷世の幼馴染で初恋の相手。

幼い頃、幼馴染に恋をして、思い切って告白した。

だけど、振られた。

そのショックのせいで俺はそいつから姿を消した。

そして10年後

「早い！展開が速すぎる…！」
と部屋で小説に文句を言っていた。

俺の名前は『黒咲雷世』

小説が好きすぎる男。

「…はあ…これの続きと後金振り込んでるか見て来るか。」

雷世は家の鍵を閉め、本屋に向かった。

そして、本屋に着く。

さつき読んでいた小説の続きがラスト一冊しかなかった。

「…はあ…こう言うの読んでる自分がバカらしい…。」ボソッ

ドンッ…！

雷世が誰かとぶつかった。
そして本を落とす。

「痛ッ…。」

「悪い！大丈夫か？」

「…あんたこそ。」

雷世は立ち上がる。

「ん？恋愛小説？」

バツ…！

雷世は自分が買おつとしていた本を男から取り上げた。

「！？…。」

雷世は顔を赤くした。

「それ…。」

「なんだよ…男がこんな物読んでたら駄目なのか！」

「違う。それ俺が担当した小説。」

「！？…あんた、もしかして小説編集者？。」

「うん。つてこれから時間あるか？」

「ある！あんたに聞きたい事がある。ちょっと待てつて。」

雷世は本の支払いに行つた。

「あつそうだ。俺は黒咲雷世。」

「つて、お前気軽に知らない人に名前教えていいのかよ。」

「今顔をあわせた。これでもう知り合いだろう？」

「！？…はははは、お前変な奴だな。」

「変な奴つていうな…！」

「俺は、もりかわ守川幽。」

「守川。」

「何で苗字？」

「いや…なんとなく。」

「ははーそうかよ。」

そして雷世と幽は本屋を出た。

「あつ…金…。」

「俺がおじる。」

「そつか？だけど返すからな…！」

「分かつた。じゃあメモつてろよ。」

「分かつてる…！…」

雷世は幽の軽い挑発にムキになる。

可愛いカフュのお店に入る。

雷世はさつき買った小説を開ける。

そして読み始める。

「小説、すきなのか？」

「あつおつ。」

「集中力が半端ないな。」

「そうか？ だけど、守川が担当してる小説かあ～。」

「どうかしたのか？ 別に他のと変わらないだろ？ ？」

「別に。俺この人の書く小説全部持つてるぜ？ 」

「？ ！ … それ全部俺が担当だぞ？」

「うん。だつてこの人の書く小説。面白いしだけどちょっと展開が速いというか」 『コツ

「お前つて結構、いい奴？」

「そんなわけないだろ？ が…！」

雷世は顔を真っ赤にする。

「照れるな。」

「照れてない…！」

雷世の携帯が鳴る。

「はい？」

雷世は電話に出る。

『あつ、雷世か？』

『？？ どちら様？』

『俺だよ。紅葉。』

『！？…』

『久しぶりだな。今日なお前の所行くから。よろしく。』

『無理！ 俺今日は家に帰れないから…』

『何でだよ。お前仕事とかしてないだろ？ 』

『お前に関係ないだろうが！ ボケ！ 今日は誰かの家に泊まれ！ 』

雷世は怒つて電話を切った。

『どうかしたのか？』

「…あつ…守川！今日家に泊めてくれないか？」

「いいけど、俺の家には妹が居るぞ？」

「それでもいい。」

「そつか？ならいいけど。」

「サンキュー！」

雷世は幽の家に泊まる事に。

「…はあ～雷世って本当に照れ屋だな。」

「……。」

雷世は暗かった。

ずっと、顔を下に向けて歩いて歩いていた。

何で……なんであいつが……追つてきた？俺を？…。

雷世は横に首を振る。

「大丈夫か？お前？」

「？！……ああ……おう。」

「もうすぐ着くぞ。」

「分かった。」

つて……もう何も考えるな！……俺等しく無い……。

「着いたぞ。」

「……。」

雷世の目の前には大きな建物があつた。

「マンション？」

「そうだけど。」

「そつかーつてでかいなあ～」

雷世は棒読みであたりを見る。

「お前、あんまり驚いてないな。」ニッ
「別に……俺の家もこれよりデカイしな。」

「マジかよ。」

「おつー！」コジ

雷世と幽はマンションの中に入り。

幽の部屋まで行つた。

ガチャツ

「お兄ちゃん、おかえり！」 二口ツ

「ただいま、唯」 二口ツ

「？！」

幽の家に入つたら小さな女の子が出迎えてくれた。

「あつ、初めまして。守川唯もりかわゆいです！よろしくお願ねがいします。」

唯は丁寧にお辞儀をしてあいさつした。

「……俺は……黒咲雷世。」

「雷世お兄ちゃん！」 二口ツ

ドキツ

「！？……ああ……。」

雷世は頬を赤く染めてなぜか焦つている。

「唯。雷世が照れてるから。その辺な！」 二口ツ

「照れてない！……」

「そうか？」

「子供の……対応が分からぬだけだ！」

「ふうん、そうには見えないけどなあ～」

ギクツ！

「……。」

一々むかつく……。

「じゃあ、私は晩御飯の用意するね」 二口ツ

「あつそうだ。今日は雷世が泊まるからな。」

「えつ！雷世お兄ちゃん泊まつてくれるの！？」

なぜか唯は雷世が泊まると聞き、田を輝かせる。

「……ああ、理由が合つてな。」

「じゃあ…今日の飯は豪華にする！」

だから、お兄ちゃんも手伝ってね……」「はいはい。」

「つて、守川つて料理できるのか?」「出来るけど?」

「そうか……」「なんだよ?」「別に……」

「もしかして、お前出来ないの?」「ムカツ!」「?……できるわ!俺をバカにするな……」「じゃあ、勝負するか?」「!?……おう!やつてやる!……」

雷世はまたまた、幽の挑発に乗つてしまつた。

「つてお兄ちゃん!雷世お兄ちゃん、お姫さんだよ?」「いじんだよ!」「口ッ」「もう。しようがないなあ、雷世お兄ちゃん頑張つて……」「!?……分かつてる……。」

雷世は少し焦つていた。

……ヤバイ、俺料理できない……つて人生で料理なんて1回も……。

「で、何料理作るんだ?」「唯が決めてくれるよ。」「料理というか……林檎の皮を向いてね」「口ッ」「勝者が敗者に一つだけ命令を聞かせるでよくなのか?」「分かつた!受けて立つてやる!……」「幽と雷世は包丁と林檎を持つ。

「よー！…スタート…！」

「……。」

雷世は林檎をじっと見ていた。

どう剥ぐ？俺いつも林檎なんてかじってるんだけど…。

雷世は幽の方を見る。

幽は器用に林檎の皮を剥いていた。

「……。」

「雷世？どうかしたのか？」

ハツ！-

「？！…べ、別に何でもないし！」

雷世は頬を赤くする。

何、俺見とれてるんだよ！…相手は男だぞ…。

「……。」

雷世も林檎の皮を剥いていく。

ブスツ

「痛ッ！…！」

雷世は包丁で指を切った。

「大丈夫か？」

「大丈夫？雷世お兄ちゃん？」

「ああ…大丈夫だ。」

「チッ…。」

「！？…。」

幽は雷世のきつた指を舐めた。

「唯、布とかある？」

「あるよおー！…！」

雷世のきつた指に布を巻く。

「これで大丈夫だろ？」「

「…ありがとう…。」

「お前、料理できないだろ？」「

「…？…悪かつたな！俺は不器用だよ…。」

「はいはい。」

そして、料理は出来て、皆で仲良く食べた。

それから遊んだり、勉強教えたりして、一日を終わらせた。

「…。」

だけど、皆寝ていたが俺は起きた。

そして、携帯を見た。

「！？…。」

力タツ

携帯を落とす、雷世。

「…紅葉…。」

今夜12時に 公園で待つてる。

「…。」

会いたい…会いたくない…。

だけど俺は…。

ガチャツ

そのまま行つてしまつた。

プロローグ 2

「はーい！…皆さん、今日も元気かな??」 二コッ

「本当に、人気だよねえ♪ 夜昴^{やよい}」

「マジ、それ思つたあーーー！」

人間は大嫌い。何年経っても、好きになれない。

それが俺の、運命^{さだめ}ならば、しちゃうがない。

そして、ある日…俺に不幸がやってくる。

バンッ！！

時間^{とき} 夜光^{やこう}

19歳の男。

生意氣で素直で極度の単純バカ。
女装している。

大人気の有名モデル『夜昴^{やよい}』

人間が大嫌い。

煤城^{すすしろ} 黒弥^{くろみ}

23歳の男。

□下手で極度の人見知り。

人が居ない所だと、性格変わるらしい。
マフィアのボスでなぜか日本にやつてきたらしい。
雷世の両親と知り合いらしい。

カシャツ

「そろそろ、もっとポーズをつけて！」

カシャツ！

「もつと、笑って！」

カシャツ！

何が楽しいのか分からぬ。

ただ、楽しそうな俺を取つてるだけだろうが。

「よし、じゃあ休憩にしようか！」 一コッ

「はい！分かりました」 一コッ

俺はただの、操られた人形なのだろうな。

「今日も絶好調だね、夜昂」 一コッ

「別に……」

女の子の服を着ているが男である。

名前は『時間

夜光

……。』

俺は望んで、こんな格好や仕事をしたくない。

ただ、あいつが言つから。

「夜昂ちゃん。今日はもつ帰つていこよ」 一コッ

「はい。今日はありがとうございました！お疲れ様です」ニコッ
夜光とマネージャーはその場から去つて行つた。

「俺、もう帰る。」

「えつ？これからまで仕事が！！」

「全部キャンセルすりやーいいだろうが。」

「ちょ！夜光！！」

「……。」

夜光は女の服を脱いで部屋から出て行つた。

「……だるい。」

夜光は公園のベンチで座つていた。

世界はつまらない……誰か俺の理想をぶち壊してほしかつた。

夜光は夜までベンチで座つていた。

「夜かあ～……もう帰るか。」

「ハア……ハア……。」

「ん？。」

「ハア……グッ！」

「！？……。」

バタンッ

木の側で人が倒れていた。

「おい！大丈夫か？」

「ん？……誰？」

「！？……。」

倒れていた男が突然、夜光の顔に触れる。

「人？……何か、可愛い。」

「？！……なつ！……。」

夜光は顔を真っ赤にする。

フラツ

「ヤバイ。」

バタンツ

「おい！おい！」

男はそのまま眠ってしまった。

パチツ

「ん？。」

男は目を覚ます。

「あつ。」

「ンンンン。」

夜光はベッドにもたれて座りながら眠っていた。

「俺の事を助けてくれたのか…。」

「ん？…あつ起きたのか？」

「…。」

夜光は起きたてでボーッとしていた。

「俺を助けてくれてありがとう」ニコッ

「！？。」

夜光は褒められて一気に顔を真っ赤にした。

「どうかしたのか？」

「…な、なんでもない。」

「じゃあ、これが俺のお礼だ。」

「！？。」

男が夜光の唇を塞いだ。

「な、何すんだよ！…！」

夜光は顔を真っ赤にした。

「別に、俺今日からここに居ていいいか?」

「なつ！？。」

「お前、有名人だろ？。」

「何でそれを！！。」

「なんとなく。似てるなあ～って。」

「！？。」

夜光は焦る様子だった。

「分かつたよ。」

「ありがとう」――コツ

ドキッ！

「！？。」

夜光は顔を真っ赤にした。

「俺は、煤城黒弥すすしまくろみよろしくな」

「俺は、時間夜光。」

「うん、じゃあ今日からよろしく」――コツ

「…おう。」

「あれ？今日は仕事行かないの？」

「行かない。」

「何で？」

「面倒だからな。」

「それだけか？」

「おう。」

「お前素直だな。」

「そうでもない。」

黒弥は朝からゲームをしていた。

夜光は寝転びながら、雑誌を読んでいた。

「マネージャーが迎えに来ないのか？」

「来るけど、電話してくるなって言つた。」

「はあ！？なぜだ！？」

「鬱陶しいから。」

「ふうん。」

「俺は、別にやりたくてやつてるんじゃない。」

「そつか。」ニコツ

黒弥は夜光の頭を優しく撫でる。

「……。」

「どうかしたのか？」

「なあ、前から思つてたんだけどさ。」

「ん？」

「お前つて何者だ？」

「！？。」

「最初にあつた頃、ボロボロだつただろ？？」

「……。」

黒弥は何か悲しい顔をする。

「どうなんだ?」

「……今はいえない。」

「そつか、なら買い物でもいこうぜ!」——口

「ああ、分かつた。」

そして、二人は商店街に向かつた。

「……あのつ……。」

「……。」

「黒弥さん?……。」

夜光はなぜか顔を引きずつっていた。

「……ひ、ひ、ひ、人!!。」

「黒弥! お前キャラ崩壊しそうだらうーー!」

「……う……夜光、助けてくださいい。」

ドキッ!

「!?……。」

夜光はなぜか、顔を赤くした。

「分かつた……。」

「……ありがとう……!」

「!?……。」

黒弥が夜光に抱きつく。

「なつ! ? ……離れろ! ! !」

夜光は顔を真っ赤にさせる。

「で、何買うの?」

「林檎。」

「林檎? ……どうして?」

「林檎が喰いたいから。」

「そつか」二コツ

夜光は店で林檎を買った。

「……疲れた。」

「有名な人に、結構ばれないんだね」ニコッ
「？！？」

周りの人が夜光を見る。

「…ちょっとこっち来い！！！」

そして、二人は誰も居ないとこに来た。

「ハア…お前な！！」

「何で隠すんだ？」

「！？」

黒弥は夜光に顔を近づける。

「本当は男だつて、ばらせばいいだろ？？」

「！？…それは…無理だ。」

「なぜ？」

「…俺が…臆病だから…。」

「何で、そう思うんだ？」

「！？」

夜光は顔を真っ赤にする。

「黒弥…。」

「何？」

「顔が…近い…！…！」

「照れるな。」ニコッ

「照れてない！！」

「まあ、いつか。帰るぞー。」

「…。」

俺は臆病なのか？…まあ、いいや。

プロローグ 3

僕は
一人だ。

いつも、いつも。

だけど、笑っていないと

皆が困る顔をする。

だから、いつも

「僕は大丈夫だよ！ 皆が楽しかったら僕はそれだけで嬉しい」 三五ツ

そんな奇麗事、今になれば……。

たまに、ある田舎翁に、わざわざ、

僕の本性をはかす男か…。

秋坂 葵

18歳の男。

明るくて優しそうに見えるけど本当はとてつもなくネガティブ系。
極度の貧乏人。（ホームレス並）

最強の武道家。

峰岸 みねぎし
京介 きょうすけ

21歳の男。

生意氣で明るくて結構強引でひつぽい人。
幽と仲良しの小説編集者。

僕は極度の貧乏人です。

金が無い。家が無い。服はボロボロ。頭はボサボサ。です。
だから、ただいまホームレス生活?。

「……。」

いつもダンボールの家で空を眺めるのが日課。

「はあー…何してんだろうな。さっさと仕事をして、金をバンバン稼がないと…。」

それが無理なんだよなー、本当に自分ってヘタレでバカで単純。

「電信柱に、ある一つの貼り紙が貼つてあった。

「誰でも歓迎。武道派の人大集合。」

ホームレスの少年はその貼り紙がやっている場所に向かった。

「優勝した人は…賞金1億円!」ニッ

勝つてやるー!優勝するー!絶対に!

そして、目的地に着いた。

「人…多いし。」

人がかなり多かつた。

「世界には、武道を知っている人が多いんだね。」

もしかして、僕より強い人居る?それで僕が恥じかかされて負けたらどうしよう?

知り合いのホームレスのじつちゃんに何言われるか…。

「出場する人は、舞台に上がってください。」
司会者がマイクを持つて全員に言つ。

少年は、考えていて聞こえていなかつた。

トンツ

「！？…。」

「お前も参加するんじゃ無いのか？」

「？！…えつ！？ああ、はい！…でわ！」

少年は知らない人に声をかけられて慌てて舞台に上る。

「おつと、これは若い…。」

「えつ？僕ですか？」

少年は司会者に声をかけられる。

「僕、まだ18歳ですよ？」

「若い子はいいよお～」

「えつと…。」

「18歳の君、名前は？」

「…ああ…秋阪葵あきさかあおいです。」

「いかにも女の子の名前だね。」二コツ

「女の子のなま…。」ガーンツ

葵は酷く落ち込んだ。

「うだよねえ～僕は所詮女みたいな顔で女みたいな名前ですよー。」

「武道は好きかな？葵君。」

「好きですよ。強い人と戦えるのが凄く好きー。」二コツ

「おお！…！ならば戦つてみますか！…！」

「はい！…」

扉から「」つに男が一人出てきた。

「……。」

葵の田つきが変わった。

「では！スタートです！」

「おい、ガキ。怪我したくなきやー帰れ。」

「… そうですか。そんな余裕をすると怪我しますよ？」

「なんだと！－！このガキ！！！！」

葵が男を挑発した、男は葵に殴りかかるが、葵は軽々しくよける。ダンッ！！！

「ガハッ！！」

「… 僕を甘く見たことを後悔しましたね。」ニッ

葵は一人の男を地面にたたきつけた。

「こいつより、俺の方が強いぞ？チビ。」

「… そうですか。ならさつあと、倒れてくださいよ。」

バタンッ

葵は何もしていないのに、男は倒れた。

一人の男を倒している時に一人目の男にも攻撃したらしい。

「これは…凄すぎます！！」

司会者が、葵の手をつかむ。

バシッ！

「… 僕に気安く触らないでくれますか？」

ビクッ！

「…？…。」

司会者は葵の田つきに体が怯えていた。

バシッ！

「…？…。」

「へえ～さつきの奴とは別人だな。」一ツ

「…誰ですか？離して下さい。」

「無理。こいつは俺のお気に入りだな。」

「はあ？何を言つてゐんですか？理解不明…とやつさと離して下さい。」

「無理だつて、言つてんだらう。」

「そうですか…なら。」

葵が男の手をつかんで投げ飛ばす。

タツ

「…。」

男は軽々と地面に着地する。

「まあ、いいや。お前、今日から俺の奴隸になれ。」

「…却下。」

葵は即答で応える。

「何で？」

「…僕は帰ります。」

「じゃあ、俺ついて行こ。」

「はあ！？着いてこないでください！！」

「無理。お前が俺の物になるまでは着いていく。」

「なつ…！」

なんですか…この鬱陶しい人は…。

5話 京介×葵 1（後書き）

葵つて二重人格なのかなあ〜？？
(作者も分からぬ葵。 W)

あの日は、疲れすぎてそのまま寝てしまった。
あの人は多分、まだ帰っていないと思う。

ん？

いつものダンボール。

朝の歴史とでも結麗に見えてくれ

シナリオ

〔 〕

ドキドキ！

：別にいいんですけど

葵は糸を赤く染める

「ああ、そうだ。俺は、峰岸京介！よろしくな」――口上

卷之三

「昨日と違うんですけど……。」

「まあ、いいだろ？お前、こんな所に居ても面白くないだろ？」「

「はあ？ 何が違うだ？」

峰岸さんは仕事してますか？」

「そんなの詰まっていますよ!!テキサスよ!!!!

「はあ？」

葵は京介の手を引っ張る。

「どこですか？仕事場。」

「……はあ……。」

そして、一人は無事に編集部に来た。

「ちゃんと、仕事してくださいよ！」

「何？俺の心配？かわいいね」二コラ

「違いますよ！」

「そつか？」

「じゃあ、僕行きますよ。」

「ああ……そうだ。お礼。」

「えつ？」

グイッ！

「ん！？……。」

京介が葵の唇に自分の唇を重ねた。

「なつ！？……。」

葵は顔を真っ赤にする。

「甘い。」

「はあ！？」

「まあいいや。気をつけて帰れよお」二コラ

「……。」

葵は顔を真っ赤にして、走つて帰つた。

京介はしゃがみこんで頭を抱える。

「何してんだろ？……俺は。」

京介は頬が赤かった。

「可愛すぎなんだよ……葵。」

「…………。」

「……うわあーー最悪ーーー僕の純情返せーー。」

葵はテンションが下がっていた。

「はあーーー。あの人ーー最悪最低な極悪人ーーですよーー。」

葵は顔を真っ赤にする。

何で、こんなにドキドキして顔を赤くしてんだらうーーー。

「僕は……ホモじゃないのに……。」ボソッ

「ん?…。」

葵は、何かを見つけたらしい。

「…雷?。」

「ん?これって、あいつの?」

京介が見つけたのは、綺麗なペンダントだった。

「あいつ、居るかな??」

京介は葵を追いかける。

「雷世ーーー。」

「ん?葵!」

「久々だね」二口ツ

「お前は、相変わらず、ホームレスか？」

「うん」——コラッ

「だけど、元気でよかつた。」

「そつか？僕も雷が元気でよかつたよ」——コラッ

「おう」

「葵……」

「……？」

葵の後ろから京介が来た。

「峰岸さん……？」

「？？」

「ほり、これ。お前のだろ！」——コラッ

「あつ……そうです。わざわざあつがとひいざれこまか」——コラッ

「ドキッ！」

「……別に」——コラッ

「雷世。行くぞ。」

「ああ、じゃあ俺行くなー！じゃあな！」

雷世は誰かに呼ばれ、そのまま去つて行つた。

「峰岸さん。仕事に戻らないんですか？」

「俺はお前に借りが出来たぞ？」

「お礼すればいいのですか？」

「うう。」

「何ですか？」

「俺の名前。」

「峰岸さん？の名前？」

「京介って呼べよ。」

「……分かりました。」

「たましに呼んで見てくれないか？」

「……きよ……京介。」

「よし、じゃあ俺は行くわー！じゃあな」——コラッ

京介は仕事に戻つた。

「…やつぱ、可愛すぎだらう…葵は。」

京介は顔を隠して顔を真つ赤にしていた。

「…今日も一日頑張りつーーー！」

「ハア…ハア…。
俺は無我夢中で走っていた。

「紅葉…」
「雷世…」
「！？…。」

紅葉は雷世に抱きついた。

「紅葉？…。」
「雷世…俺は…。」
トンツ

雷世は紅葉から離れた。

「勘違いするな。ただ、俺はもつお前と関わりたくないから
それを伝えに来ただけだ…！」

「…ない。」

「えつ？…。」

「俺は、認めない。」

「な…。」

「俺は雷世が好きなんだよ…！」

お前にあの頃告白されてから、ずっと…俺は後悔してた。」

「！？…。」

紅葉は雷世の手をつかむ。

「何で、分からんんだよ…！」

「…。」

「もう10年経った。それで俺の事も諦めたのか？」

「俺は、お前に振られてもう諦めた！もう、恋もしないと誓つた…！」

「！」

「雷世…。」

「はいはい、話はやしまで。俺の雷世を返してくれれるか？」

グイッ！

「！？ 守川！」

「幽だつて。」

「何で？。」

「俺、あの時おきてたんだよなあ～」ニッ

「なつ！？。」

「まあ、まあ。で夜で何かする気なのか？」

「雷世」。

「…」めん。

雷世は悲しい顔をして紅葉に謝った。

「…。」

紅葉はそのまま去った。

「じゃあ、帰るか。幽。」

雷世が帰ろうとするが。

グイッ！

雷世の手を引っ張る幽。

トンチ！

「！？。」

雷世を壁に押す。

「幽？。」

「俺にいう事はないのか？」

「べ、別にない。」

幽は雷世に顔を近づける。

「嘘だ。」

「…嘘なんかついてない…。」

雷世は頬を赤くする。

「そうか。」

「……？」

幽は雷世の唇に自分の唇を重ねた。

「ん！？？」

雷世が幽を押すがびくともしない。

「ん！？？」

そして、やっと唇が離れた。

「ハア……ハア……。」

雷世は顔を真っ赤にしていた。

「ドンッ！？！」

雷世が幽を押しした。

「お前……最低だ！？！」

雷世はそのまま走つてその場を去つた。

「……はあ～～。」

「……。」

雷世はいつもより、ボーッとしていた。

昨日の夜の事があれば誰でもそつなると想ひつ。

昨日、あの夜。

幽の家に帰つて、荷物だけ持つて帰つたらしき。

「……最悪。」

雷世は自分の家を散らかしていた。

グウー。

雷世の腹が鳴る。

「買出し……。」

雷世はフランフラン歩いていた。

だけどそんな雷世だけど、一方幽は？。

「ん？ どうかしたのか？ 守川？」

「別に、って何で居るんだよ、峰岸。」

「俺の用事」 一コラ

「ああ～、そうかよ。」

「俺が相談のつてやろ？ つか？ 同じホモ同士」 一コラ

「ふざけるな！ お前みたいなドジやうつに頼れるか。」

「ははは、そなうかあ～」 一コラ

幽はソファーのある編集部の部屋でコーヒーを飲んでいたら京介がやつてくる。

「で、可愛い子と喧嘩でもしたか？」

「…お前つて昔から鋭いな。」

「はははは、そうだよ」二口ツ

「はあ～…何か不幸だ～。」

「はいはい、だけど頑張れ！」二口ツ

京介は部屋から出て行つた。

「……。」

最悪だな…俺も。

「ドンッ！…！」

「痛ッ！…。」

「ああ、『ごめんなさい…！』

「ああ、いいよ。別…？…黒弥さん…！」

「？…雷世坊ちゃん！」

雷世とぶつかつた人は、黒弥。

雷世の両親と知り合いらしい。よく雷世と遊んでいた仲。

「相変わらずだな」二口ツ

「どうしたんですか？こんな所で。」

「？…ちょっと、買出し…。」

「坊ちゃん、あんまり買ったものばかりではなく実家から、家政婦をやつとたらどうです？」

「…いやだ。俺は一人でも大丈夫だ！そうだ、黒弥が俺の家に来いよ」二口ツ

「ああ、それは無理です。今は知り合いの家に居候させてもらつています」二口ツ

「そつか、仲良くしろよー分かつたな？」二口ツ

「分かつてますよ」二口ツ

黒弥と雷世はその後、別れを行つて去つた。

「…ん？」

雷世は知らないうちに幽が働いている、編集部の建物の目の前に来ていた。

「もう、帰らう。」

雷世はそのまま買い物をしないで走つて家に帰つた。それと同時に、幽が編集部の建物から出てきた。

「…ん？誰か居たような？…。」

幽は雷世と逆の道に向かつて歩いて行つた。

パンッ！

雷世は小説を閉じる。

「はあ…。」

雷世のため息は一体いつ止まるんでしょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1379ba/>

本気の初恋

2012年1月12日20時54分発行